

# 全国大学書写書道教育学会 第21回大会（愛知大会）開催要項（第2次案内）

下記の通り、当会第21回大会を開催します。多数ご参加ください。

- 1、主 催 全国大学書写書道教育学会
- 2、後 援 愛知県教育委員会・名古屋市教育委員会
- 3、開催大学 愛知教育大学
- 4、期 日 平成18年10月3日（火）
- 5、会 場 名古屋国際会議場  
所在地 〒456-0036 名古屋市熱田区熱田西町1番1号
- 6、参 加 費 4,000円
- 7、日 程（予定）

## 10月3日（火）

9:10～9:30 受付

### ◆研究発表（午前の部）

#### 〈第1分科会〉2号館3階 234会議室

9:40～9:45 発表と質疑等の案内

司会 小竹光夫（兵庫教育大学）

9:45～10:15（1-1）姿勢や筆記具の持ち方の修正による効果を中学生に実感させる方法の研究  
－カーボン紙法の導入による筆圧を意識させる取り組みを通して－

茨城大学 斎木 久美

茨城大学附属中学校 橋本 浩志

10:25～10:55（1-2）書字における書きやすさの重要性と書字動作に関する基礎的研究

上越教育大学 押木 秀樹

上越市立城北中学校 清水陽一郎

11:05～11:35（1-3）書道における学びのスタイルを解明するための試み

長崎大学 鈴木 慶子

長崎大学教務職員 林 朋美

長崎大学 大森アユミ

#### 〈第2分科会〉2号館3階 231会議室

9:40～9:45 発表と質疑等の案内

司会 平形精一（静岡大学）

9:45～10:15（2-1）児童の字形習得過程に関する試論

－「百」「土」「大」「金」に見られる横画の長さの推移の検討－

岩手県福岡高等学校 上野 光久

10:25～10:55（2-2）左手硬筆書写での用紙の置き方と字形の関係に関する分析的研究

－書写教育の視点から－

長野県松本深志高等学校 小林比出代

11:05～11:35（2-3）字形の習得過程における学習者の思考に関する研究

横浜国立大学 青山 浩之

慶應義塾湘南藤沢中・高等部 當波ゆう子

横浜国立大学附属横浜小学校 柳澤ももこ

〈第3分科会〉 2号館3階 232会議室		
9:40～ 9:45	発表と質疑等の案内	司会 住川英明（鳥取大学）
9:45～10:15 (3-1)	国定第四期本『高等小學國語書キ方手本』における鑑賞教材の導入過程 －大正期から昭和初期にかけての鑑賞教育論を中心として－	東京学芸大学大学院 清水 文博
10:25～10:55 (3-2)	明治・大正期の刊行雑誌からみる硬筆書方教授に関する一考察	国立教育政策研究所 柿元 八重
11:05～11:35 (3-3)	明治初期から検定期までの教科書にみる仮名指導 －村田海石本を中心に－	四国大学大学院 満寿川愛弓 四国大学 久米 公
〈第4分科会〉 2号館3階 233会議室		
9:40～ 9:45	発表と質疑等の案内	司会 萱のり子（大阪教育大学）
9:45～10:15 (4-1)	行書の書写力の定着度に関する研究 －大学生と中学生の行書の書写力の実態調査をとおして－	千葉大学大学院 佐藤 瑞穂 千葉大学 樋口 咲子 千葉大学 津村 幸恵 千葉大学附属中学校 本田 容子
10:25～10:55 (4-2)	小学校国語科書写における「毛筆作品制作」の現状と課題 －静岡県公立小学校教育研究会書写部会員への調査を通して－	静岡大学・静岡大学附属静岡小学校 杉崎 哲子
11:05～11:35 (4-3)	書写教育におけるカリキュラム開発のための基礎的研究 －「変身作文」を取り入れた書写授業の実践を中心に－	尾道市立土堂小学校 藤井 浩治 広島大学 松本 仁志
11:45～11:55	記念撮影	
11:55～12:50	昼食・休憩	
12:50～13:30	◆総 会 (詳細は、別紙「総会次第」を参照)	2号館3階 234会議室
◆講演会・シンポジウム(午後の部) 2号館3階 234会議室		
13:50～15:00	講演会「これからの国語教育・書写教育」	
	講師 甲斐 瞳朗先生 (京都橘大学教授・前国立国語研究所長)	
15:10～16:30	シンポジウム「書写教育の実情と今後の展望」	
	コーディネーター 廣瀬 裕之 (武蔵野大学)	
	パネラー 織田 祥啓 (名古屋市立東星中学校)	
	武田 玲香 (岡崎市立六ツ美西部小学校)	
	町川 哲 (高松市立牟礼北小学校)	
	山澄 智英 (川口市立西中学校)	
16:35	閉会の辞	
16:50～17:20	若手研究者による懇親会 (2号館3階 234会議室)	
17:30～19:30	三学会合同懇親会	

## 8、紀要への論文掲載

大会における口頭発表を論文として紀要『書写書道教育研究』に掲載することを希望する場合は、執筆要領（当学会ホームページに掲載）によって応募してください。また、執筆要領によって執筆された投稿論文も受け付けます。ただし、応募された論文は、査読を経て掲載の可否が決定されます。送付先、締め切り等の詳細は、ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jacse/> をご覧ください。

## 9、大会記念撮影（三学会合同）

日 時 10月3日（火）11時45分から11時55分  
場 所 当日、ご案内します。

## 10、若手研究者による懇話会

日 時 10月3日（火）午後4時50分から午後5時20分に行います。  
会 場 2号館3階 234会議室

## 11、懇親会（三学会合同）

日 時 10月3日（火）午後5時30分から午後7時30分まで  
会 場 展望レストラン「パステル」（名古屋国際会議場1号館7階）  
会 費 7,000円

## 12、講演会・シンポジウムへの一般参加について

内容は、上記の日程中に記載の通りです。この行事には、会員でない方も参加できることとしますので、関心のある方へ、同送のチラシを利用（コピー）してお知らせ願います。会員外の参加者には配布資料代として実費負担をお願いする場合があります。

## 13、『学会賞』『学会功労賞』の贈呈

書写書道教育に関する優れた業績に対し、『学会賞』『学会功労賞』を贈ります。

## 14、理事会

次のように理事会を開催します。常任理事、理事は、出席してください。

日 時 10月2日（月）午後5時30分から  
会 場 ジャパンーズキュイジーヌ ヴェルテックスガーデン  
名古屋市中区金山4-6-25 金山ワシントンホテルプラザ10F  
TEL 052-339-1333 フリーダイヤル 0120-580-388  
(金山総合駅北口から徒歩2分／地下鉄③出口から徒歩1分)

## 15、参加申し込み

参加者数を把握し、受付、会場、配付資料などの準備をする都合がありますので、参加する方は、添付の参加者調査カード（はがき）を用いて、9月20日（水）までに必着でお申し込みください。

## 16. 昼食・会場への交通・宿泊について

[昼食] 会場内にレストランがあります。 展望レストラン「パステル」 1号館7F  
 カフェテリア「カスケード」 3号館B1F  
 喫茶ラウンジ「ユリ」 2号館連絡通路2F

### [会場への交通]

	タクシー	名古屋駅 → 名古屋国際会議場	約2,000円 (約20分)
名古屋駅 (東海道新幹線 JR線、名鉄線 近鉄線)	地下鉄	名古屋駅→地下鉄東山線「栄」 地下鉄桜通線「久屋大通」 →名城線「金山」 名古屋港行き「日比野」下車①④出口より徒歩 新瑞橋方面(左回り)「西高蔵」下車②出口より徒歩 →(徒歩約5分)→名古屋国際会議場	地下鉄 230円 (約30分)
JR在来線 + 地下鉄		JR在来線(東海道線・中央線)「名古屋駅」→「金山」で地下鉄に乗換 →名城線「金山」 名古屋港行き「日比野」下車①④出口より徒歩 新瑞橋方面(左回り)「西高蔵」下車②出口より徒歩 →(徒歩約5分)→名古屋国際会議場	JR 160円 + 地下鉄200円 (約30分)
中部国際空港	名鉄線 + 地下鉄	中部国際空港→名鉄空港線(快速特急25分)→「金山」で地下鉄に乗換 →名城線「金山」 名古屋港行き「日比野」下車①④出口より徒歩 新瑞橋方面(左回り)「西高蔵」下車②出口より徒歩 →(徒歩約5分)→名古屋国際会議場	空港線 1,140円 + 地下鉄200円 (約40分)

[宿泊] ホテル等に直接お申し込みください。

<参考> 「金山」駅周辺のホテル (シングル1泊)

全日空ホテルズ・ホテルグランコート名古屋	14,800円~	南口徒歩1分	Tel. 052-638-4111
名鉄イン名古屋金山	6,800円~	北口徒歩4分	Tel. 052-324-3434
名古屋金山ワシントンホテルプラザ	6,000円~	北口徒歩2分	Tel. 052-322-1111
金山プラザホテル	5,775円~	北口徒歩7分	Tel. 052-331-6411

### [お問い合わせ]

愛知教育大学 国語教育講座 書道研究室 (風岡)

〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1 Tel&Fax0566-26-2232

### 〈関連日程〉

- 本学会と併せて、下記の学会等が開催されます。（参加費は、それぞれ別扱いです。）
- \*10月2日（月） 13:00～ 日本教育大学協会（教大協）書道教育部門会  
17:30～ 全国大学書写書道教育学会理事会  
18:30～ 全国大学書道学会幹事会
  - \*10月3日（火） 9:10～ 全国大学書写書道教育学会（大会）  
17:30～ 三学会合同懇親会
  - \*10月4日（水） 9:10～ 全国大学書道学会（大会）
  - \*10月2日～4日 全国大学書道学会会員書作展

平成 18 年度 全国大学書写書道教育学会

第21回大会（愛知大会）

## 講演会・シンポジウム

講 演 会 13:50～15:00

「これからの国語教育・書写教育」

講師 甲斐睦朗先生 京都橘大学教授・前国立国語研究所長

シンポジウム 15:10～16:30

テーマ「書写教育の実情と今後の展望」

パネラー 織田祥啓 名古屋市立東星中学校教諭

武田玲香 岡崎市立六ツ美西部小学校教諭

町川 哲 高松市立牟礼北小学校教頭

山澄智英 川口市立西中学校教諭

コーディネーター 廣瀬 裕之 武藏野大学教授

日時：平成18年10月3日（火）13:50～16:30

会場：名古屋国際会議場 2号館3階234会議室

名港線「日比野駅」下車（名古屋市熱田区熱田西町1-1）TEL052-683-7711

主催 全国大学書写書道教育学会

後援 愛知県教育委員会・名古屋市教育委員会

★ ご参加をお待ちしています。

\*会員以外の方も参加できます。\*配布資料代として実費負担をお願いする場合があります。

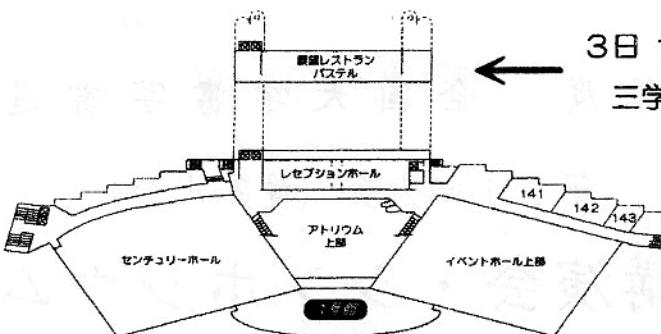
# 名古屋国際会議場 会場案内図

7F

3日 17:00~

三学会合同懇親会会場

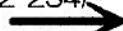
4F



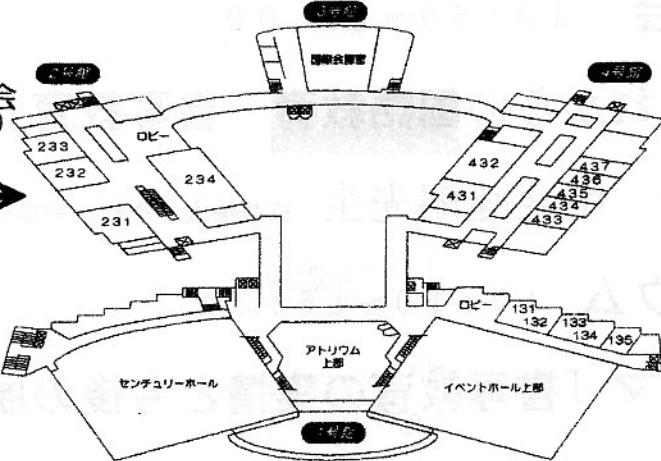
2日 教大協 書道部門会 (234)

3日 全国大学書写書道教育学会  
(231・232・233・234)

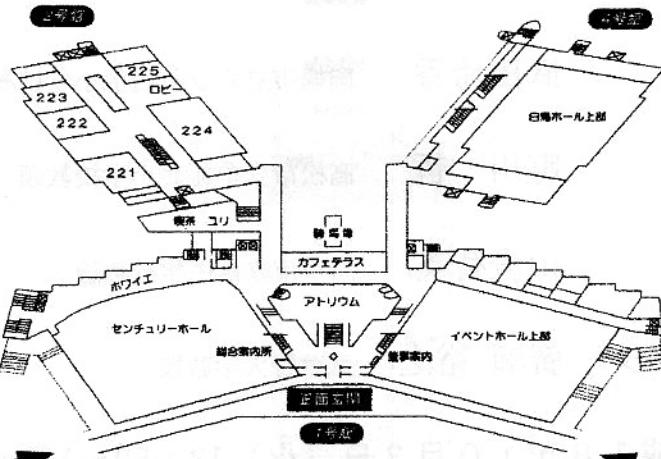
4日 全国大学書道学会  
(231・232・234)



3F



2F



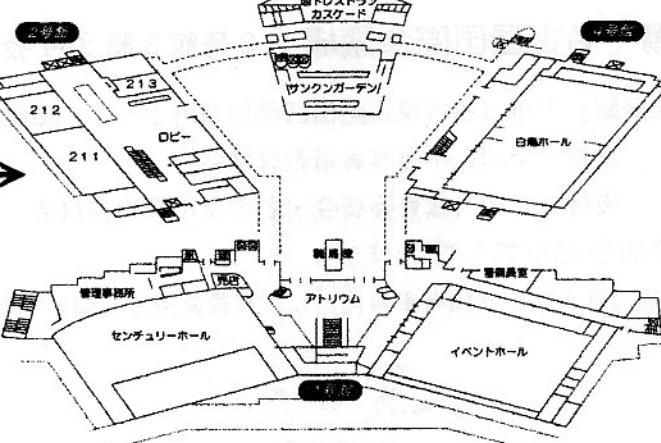
地下鉄 西高蔵駅 2番出口から  
徒歩5分

地下鉄 日比野駅 1番出口から  
徒歩5分

2~4日

全国大学書道学会会員展  
著書論文図録等展示

(211展示室)



# 全国大学書写書道教育学会 第21回大会（愛知大会）研究発表

## ◆第1分科会

1-1

### 姿勢や筆記具の持ち方の修正による効果を中学生に実感させる方法の研究 — カーボン紙法の導入による筆圧を意識させる取り組みを通して —

茨城大学教育学部助教授 斎木久美  
茨城大学教育学部附属中学校 橋本浩志

先行研究でも明らかにされているように、生徒の書字活動において姿勢や筆記具の持ち方が望ましい状態でない場合、長時間の書字活動になると疲労により学習の意欲や効率が低下してしまうことが認められる。こうした状態が習慣化している場合、中学生自身が気づき修正することは期待できない。良い状態を知識だけでなく自身で実感させ、納得させることによって、改善への意欲も生じてくるはずである。ところが、筆圧などは目で見えないため、長時間書字させたり、測定機器を用いたりしなければ、姿勢や持ち方の修正による効果を生徒に実感させることは困難であった。

そこで本研究では姿勢や持ち方の修正による効果を生徒に実感させるため、筆圧を簡便に視覚化する方法としてカーボン紙を用いた方法の導入を試みた。この方法はカーボン紙と白紙を交互にはさんで綴じたものに書字し、文字が書かれた枚数と濃さの違いから筆圧の様子を観察できるものである。この方法で筆記具や持ち方を変えて中学2年生約160名に書字させたところ、学習者が自身の筆圧の変化を確認することができ、無理のない姿勢と望ましい筆記具の持ち方が書字する際の大変な要素であることを実感させることができた。この結果をもとに、実際の教育の現場に生かす姿勢や筆記具の持ち方指導の効果的な方法について報告する。

1-2

### 書字における書きやすさの重要性と書字動作に関する基礎的研究

上越教育大学学校教育学部助教授 押木 秀樹  
上越市立城北中学校教諭 清水陽一郎

言語の機能としての「文字を書くこと」においては、書かれた文字・文書の「読みやすさ」が重要な条件となる。一方、文字言語の運用において情報機器の使用という選択肢が増えた現代では、狭義の言語機能以外の部分を検討することに加え、読みやすさ以外の要素にも目を向けておく必要があろう。その一つが「書きやすさ」であり、早く書けることに加え、疲れにくい、気持ちよく書けるといったことが該当すると考える。さらに一步進めて、書くことが楽しいといった積極的な方向性も考え得る。

本研究は、書字に対する好き嫌いや得意・不得意等の意識と、書字速度や疲労の自己認識および筆圧・筆速測定結果から、「書きやすく」書くことの重要性について確認するとともに、書きやすさの向上の方策について提案する。

具体的に以下の作業をおこなう。書きやすさの重要性については、疲労・速度・筆圧・持ち方に関する自己認識、文字を書くことに対する好嫌・得意不得意、自身の文字に対する自己評価等についてのアンケートを実施し、各項目間の相関について検討する。またアンケート対象者から抽出した被験者に対し、筆圧等の測定をおこなうことで、自己認識の客観性について検討する。書きやすさの向上については、従来から述べられている行書の特徴を動的視点から見直し、その要素の学習を試みるとともに、学習前後の書字動作を分析する。以上から「書きやすく」書くことの重要性について検討するとともに、書きやすさのための書字動作について述べる。

# 全国大学書写道教育学会 第21回大会（愛知大会）研究発表

1-3

## 書道における学びのスタイルを解明するための試み

長崎大学教育学部助教授 鈴木慶子

長崎大学教育学部教務職員 林朋美

長崎大学教育学部非常勤講師 大森アユミ

第20回大会において、大森と林は、「一人ひとりの学習の歩みを追跡することによる授業の再構築」を口頭発表した。そこでは、学習者一人ひとりの学びを観察する視点として、①表現力、②鑑賞力、③自己学習力をあげ、それにそって、詳細な学習過程の追跡を行った。そして、一人ひとりの学習者が、実感を持って確実に伸びることのできる授業を構築していくと考えていた。

しかしながら、第20回大会発表の段階では、詳細な学習過程の追跡が個別状況の把握にとどまりがちであり、普遍的な要件を抽出できないために、より学習効果の高い授業を再構築するところまで到達できなかった。

以上の成果と課題をふまえて、本研究では、学習過程の追跡を個別状況の把握にとどまらせず、「学びのスタイル」ともいるべき類型を導き出していくこととする。そして、そのことによって、よく伸びる学習者の要件、停滞しがちな学習者の要件、あるいは成就感をもつことのできる学びの要件等について分析し、鑑賞力、表現力、自己学習力の関係等についても考察していくこととする。

主な役割分担としては、次のように行う。鈴木が研究の方針をたて、それにもとづいて大森が授業を行い、授業中に産出されたポートフォリオの分析方法については林がデザインする。なお、制作物の評価、学習記録の記述評価については、3人が協議し共同して行うこととする。

# 全国大学書写書道教育学会 第21回大会（愛知大会）研究発表

## ◆第2分科会

2-1

### 児童の字形習得過程に関する試論

～「百」「土」「大」「金」に見られる横画の長さの推移の検討～

岩手県立福岡高等学校 教諭 上野光久

本研究は、文字の特定の横画について、児童が書く長さの推移を学年別に比較することで、適切な長さで書けるようになる段階（学年）を推察し、字形習得の重点学年を明確にすることを目的とする。

研究の方法は、2002年から2006年の5年間、同一児童（一学級）を対象として、年一回、追跡調査をして得た文字の特定画を計測し、その推移を比較検討するものである。

調査内容は、所定の用紙により8文字（第一画あるいは最終画を書き入れるもの）を書かせるもので、8文字のうち「百・土・大・金」の4文字は毎年共通（以下「共通4文字」）、あとの4文字は共通4文字と字形の特徴から関連する学習配当漢字（以下「関連4文字」）である。

例えば2年生の場合、関連4文字を「古・里・茶・昼」とし、それぞれ「長く書くべき第一画・長く書くべき最終画・短く書くべき第一画・短く書くべき最終画」を書き入れる用紙を作成し使用した。

比較方法は、共通4文字については、書写教科書の硬筆文字を模範形例として、特定画の長さの標準偏差、適切内人數を比較し、その推移を検討した。関連4文字については、共通4文字との、それぞれの特定画の長さの相関を比較し、その推移を検討した。

その結果、特定画の長さの標準偏差が、「百」は5年生、「土」は6年生、「金」は6年生で最小であった。また、適切な長さ以内で書いた人數が、「百」は2年生・6年生、「土」は6年生、「大」は6年生、「金」は6年生で最多であった。共通4文字と関連4文字の相関についても同傾向の結果であった。

これらのことは、児童の字形に関わる画の長さの認知が、5年生段階以降に適切内に収束する傾向を示すものと言える。

この結果をもとに、小学校過程での字形習得過程モデル図を検討し提示する。

2-2

### 左手硬筆書写での用紙の置き方と字形の関係に関する分析的研究 一書写教育の視点から一

長野県松本深志高等学校 教諭 小林比出代

筆者は、「左利き者の望ましい硬筆筆記具の持ち方に関する文献的考察 一書写教育の見地から一」（『書写書道教育研究 第20号』収録、以下「拙稿①」）において、生物学（生理学）・心理学分野での左利き及び左利き者の書字に関する文献的な考察を行った。その結果、生物学・心理学の見地に鑑みると、書字行為のために左利きを右利きに変更する決定的な論拠は皆無であることが明らかとなった。左利きの児童・生徒が無理なく書字に臨めるよう、左利き者の立場に立った書字及びその教育の在り方を探求していくことが望まれる。

箱崎は、左利き者が無理なく書字するための要件に紙の置き方を挙げ、左手書字の特性を考慮し特有な問題を合理的に解決する方策として、3種の紙の置き方（通称「斜めがき筆法」「横がき筆法」「正座筆法」）を提唱した（『左きき書道教本』箱崎総一編 左利き友の会 1972）。拙稿「左手毛筆書写での半紙の置き方と字形の関係に関する分析的研究 一書写教育の視点から一」（第5回書法文化書法教育国際会議にて口頭発表、以下「拙稿②」）では、箱崎が提唱した紙の置き方を毛筆書写指導の見地から検証した。本論考では、前述3種の紙の置き方の、硬筆書写における有用性について考察する。

左手書字に関する検証は本来左手書字者を対象として行うべきだが、データ分析に充分な人數の調査対象者を集めることが難しいため、本論考では、仮に右手書字者が左手書字を試行するとの暫定的な調査方法を用いる。その際、調査対象者の負担を軽減するため、調査対象文字は分析に必要な要素を持つ平易なもの（文字の基本的な点画要素を備えた漢字、右回転ないしは左回転を主軸とする平仮名 の計10字）とし、縦書き・横書きの相違による調査で対象とする文章は、先の調査対象文字を単純に羅列したものとする。

用紙の置き方は、先述3種の置き方と体の正中に真っ直ぐ置く方法の計4種を用いる。また、硬筆筆記具の持ち方は、拙稿①で仮定したいわゆる「左利き者の望ましい硬筆筆記具の持ち方」とする。4種の置き方で、書写的に望ましい字形で書くよう試みた後のアンケート調査の結果、及び調査対象文字における各点画要素の用筆や形状・字形に生じた違いに関して、単体と縦書き・横書きの別で分析し、拙稿②での検証結果と比較しながら考察を試みる。

# 全国大学書写道教育学会 第21回大会（愛知大会）研究発表

2-3

## 字形の習得過程における学習者の思考に関する研究

横浜国立大学助教授

青山 浩之

慶應義塾湘南藤沢中・高等部非常勤講師

當波 ゆう子

横浜国立大学附属横浜小学校非常勤講師

柳澤 ももこ

学習の過程では、知識や概念、技能などの習得過程における知的経験が、学習者自身の生活経験に機能することが重視される。思考・判断・表現などの知的経験が、学習者の学力の一面を支えるといった考え方である。

書写の学習においても、文字や文書を適切に書くための知識理解、技能習得といった視点から、学習者の知的経験について考察し、効果的な学習活動に関する知見を得ておく必要がある。本学会においては、これまで、文字を書くことに関する原理や学習方法等についての研究成果が蓄積されてきているものの、文字を書く過程あるいはその学習過程における学習者の思考等に関する研究は、いまだ未整理といった状況である。

そこで、本研究では、文字を書く過程における思考について取り上げ、まずは基礎的研究としての考察を行い、学習者の字形習得場面に関わる思考の過程を調査することにした。具体的には、予備調査をもとに、字形習得のうち「画の長さ」と「画間」が関わる思考過程を見取る調査用紙を作成し、小学生と中学生を対象に実施した。

学習者の字形習得については、字形に関する概念化、一般化といった思考過程が関与すると考えられる。整った字形の知識や概念の獲得と、技能の獲得とには段階的な差異があると考えられるものの、学習者の書字に現れる所産（思考の結果としての字形）を読み取ることによって、字形習得に関わる思考の一端を示すことができる。最終的には、それらの結果をもとに、字形習得における思考をとらえた学習や支援の方策までも案出してみたい。

# 全国大学書写書道教育学会 第21回大会（愛知大会）研究発表

## ◆第3分科会

3-1

### 国定第四期本『高等小學國語書キ方手本』における鑑賞教材の導入過程 —大正期から昭和初期にかけての鑑賞教育論を中心として—

東京学芸大学大学院生 清水文博

書方の国定教科書に鑑賞教材が附載されたのは国定第四期本『高等小學國語書キ方手本』からである。四期本の編纂に関わった各務虎雄は昭和13年に『書道教育』を著し、そのなかで鑑賞教育について述べている。これまで四期本についてはこの『書道教育』を中心に述べられることが多かったが、その先駆として松本亦太郎が及ぼした影響についてはほとんど触れられていない。本論では各務の書道教育論を踏まえながら松本の教育論に光を当て、四期本に鑑賞教材が導入・附載された経緯を精査しその要因を再考・検証したいと考える。

大正期から昭和初期にかけての教育界は教育測定・教育心理学の研究が非常に旺盛になる時期であり、その先駆として東京帝国大学の教授であった松本亦太郎がいる。松本は心理学の立場から大正3年から大正10年にかけて書の鑑賞の心理に関する論説を『書苑』に連載した。その後、書道教育界においては笠井義夫等の論著のなかで鑑賞教育が盛んに謳われることとなった。そこには松本の鑑賞論や当時の芸術教育運動の影響を認めることができる。このころから書方・習字教育においては児童生徒の作品や古名筆等を鑑賞することが行われるようになつた。また中等教育の教科書には鑑賞教材が見られるようになる。そして昭和8年には図画の国定教科書に先駆けて四期本に鑑賞教材が導入された。またこのころからは時代の趨勢として鑑賞教育も国粹主義の色合いが強くなっていく。

国定四期本に鑑賞教材が導入される事となった要因の一つは当時の書道教育界において鑑賞教育が盛んに謳われていたことが考えられる。そのなかで先駆としての松本亦太郎の影響は非常に大きいと考えられるのである。

3-2

### 明治・大正期の刊行雑誌からみる硬筆書方教授に関する一考察

国立教育政策研究所 柿元八重

主に鉛筆やつけペンを中心とした硬筆の普及期である明治・大正期は、西洋製品の輸入増加や国産製品の工業化等を背景として、教育現場においても硬筆使用は急速に拡がつていった時期でもある。学制制定以来毛筆教授が中心であった習字・書方教授に対し、硬筆書方教授を強く求める声が挙つたのも大正期であった。

本学会において、これまで大正期の「書方教授書」を中心に考察した論が発表されてきているが、本研究では、「書方教授書」だけでなく、明治・大正期に刊行された教育雑誌や総合雑誌にも目を向け、「書方」に関する記事を年代順に整理した。さらに「毛筆書方」と「硬筆書方」に関わるものに分類し、そして特に硬筆書方教授について、当時どのような目的・視点・姿勢をもって論や指導が展開されていたのか考察を試みた。また、雑誌記事に掲載されている内容からわかる、当時の一般社会の硬筆に対する評価・使用の実態と、「硬筆書方教授」の対応についても論考する。

教育雑誌の中でも、当時の東京高等師範学校附属小学校の機関誌であった『教育研究』には、水戸部寅松も継続的に記事を寄せており、書方教授に関わる主張とは別の一面もうかがわせている。また、『小學校』や『日本之小學教師』といった雑誌には全国各地の訓導からの寄稿がある。ここから硬筆の使用度には地域差・学校差があったことが明確となり、これに伴い教授法にも差があったことが推測される。

当時の訓導たちが提案する教授法は、それぞれ差はあるても子どもたちの実態に基づき、教育課程に至るまで様々な工夫が凝らされたものであった。訓導たちが問題としたことをふまえ、明治から大正期に至る硬筆書方教授について精査してみたい。

# 全国大学書写道教育学会 第21回大会（愛知大会）研究発表

3-3

## 明治初期から検定期までの教科書にみる仮名指導—村田海石本を中心に—

四国大学 大学院生 満寿川 愛弓  
教 授 久 米 公

仮名の指導は、文字指導の最も基本の部分であり、毛筆、硬筆共に最初に行われる。

現在、四国大学では明治期習字教科書4500冊余の教材データベース化が進められている。それらから、明治初年以降20年までについて入門期の仮名教材がどう扱われてきたかについて以下のように考察し、その結果について発表する。

その際、明治期を通して最も多く教科書の執筆に携わったのは村田海石であり、その海石書の教科書を中心として、次のことについて考察していく。

1. 仮名指導の導入期の教材として次のようなものが見られる。それぞれの量的比率を明らかにするとともに、意図・学習効果等を考察し、また、その後のあり方とどのように繋がっていくのかを考える。

1) 「いろは歌」による導入法 3) 「字形・用筆・運筆」による導入法

2) 「身辺の単語」による導入法 4) 「短句・短文」による導入法

2. 国語関係教科目における仮名の教材は、どのように関わり合うのか。

3. 漢字指導との関連性は、どのように捉えられるか。

これらについて考察し、その後の検定教科書時代、国定教科書時代、戦後の国語科習字時代、国語科書写時代の仮名の指導のあり方にどう繋がっていくかを考える基盤としていく。

なお、平仮名とともに片仮名の指導についての考察も、並行して進めていくこととする。

# 全国大学書写書道教育学会 第21回大会（愛知大会）研究発表

## ◆第4分科会

4-1

### 行書の書写力の定着度に関する研究 —大学生と中学生の行書の書写力の実態調査をとおして—

千葉大学大学院生 佐藤瑞穂 千葉大学助教授 橋口咲子  
千葉大学非常勤講師 津村幸恵 千葉大学附属中学校 本田容子

中学校国語科書写の学習内容中、行書指導はその中核をなすものである。しかし、中学校での書写の実施率が決して高いとはいえないことや、自信をもって行書指導ができる国語科教員ばかりではないこと等、指導の実際には問題が残されている。

中学校国語科書写の行書指導に関する先行研究を整理すると、中学生の行書の書写力を高める効果的な指導方法、中学校国語科書写と高等学校芸術科書道との接続のありかたから行書学習を捉えようとするもの、教員養成課程の学生の中学校国語科免許取得に関する行書の授業改善、中学生や教員養成課程の学生の行書に対する認識や行書の書写力の実態調査と分析、等に大別することができる。

本研究は、以上のうち、中学生や教員養成課程の学生の行書に対する認識や行書の書写力の実態調査と分析に関わる研究である。今後行書の効果的な指導法を考えていくうえで、多くの被験者のデータをもとに細かく分析することから出発したいと考えたからである。

調査対象者は、千葉大学教員養成課程の学生と、千葉大学教育学部附属中学校の生徒（1年生を中心とする）である。調査内容は、大学生には、行書および行書指導に対する認識をアンケート調査の形式で行った。また、大学生と中学生に、25文字ほどの文章を縦書きと横書きでメモを書く速さで書写してもらい、大学生にはさらに、その中から抽出した漢字を指定した行書の特徴を持つ書き方で枠内に書いてもらった。以上の調査結果を、大学生では、行書学習の経験の程度により、行書の特徴ごとの定着率を測定したり、枠内に大きめに書く場合と、縦書きや横書きでメモを書く場合とで、書き方が変わるかを測定する。中学生では、縦書きや横書きでメモを書く場合、どのくらい行書的要素が文字にあらわれるかを測定する。

以上の測定結果を集計・分析し、考察を進めることとする。

4-2

### 小学校国語科書写における「毛筆作品制作」の現状と課題 —静岡県公立小学校教育研究会書写部会員への調査を通して—

静岡大学・同大附属静岡小学校非常勤講師 杉崎 哲子

毛筆書写に関しては、昭和43年代に「毛筆は硬筆の基礎」という考え方方が示され、昭和52年以降の学習指導要領改訂の度に「硬筆のための毛筆」という位置づけが明確にされて今日に至っている。これを受け、いわゆる「清書」による学習の終着や「手本」との近似を競うような作品主義的学習に対する反省をふまえて、毛筆書写学習の成果を、「作品」ではなく「まとめ書き」と呼んでいる。

ところが教科書には、「毛筆による名前の書き方」や「書き初め」等が今日でもなお取り扱われており、「硬筆のための毛筆」というねらいとは直接関係ないと思われる、「毛筆によるまとめ書き」の域を越えたとらえ方としての「毛筆作品」の位置づけを可能にしている。さらに、全国各地域の書写研究会が「書初め展」等を主催し、「作品」の序列化や「作品制作」の奨励をしている実情も無視することはできない。

「毛筆によるまとめ書き」を作品的にとらえることに対しては、学習指導要領に示された考え方に基づけば、評価も含めた問題点が挙げられる。しかし一方で、図画工作の作品制作と同様に、学習の動機づけや意欲喚起等の効用も考えられる。また毛筆使用の本来の特質として、今後の行方が気になる教育基本法改正案に示された「伝統の継承」という側面も見逃せないだろう。

そこで本研究では、「毛筆によるまとめ書き」の「作品的とらえ」に関して、まず教科書での取り扱いを見ていく。次に、現場の教師がそれをどう考えて実践しているのかを、静岡県公立小学校教育研究会書写部会員へのアンケートによって把握する。さらに児童の意識についても調査し、小学校国語科書写における「毛筆作品制作」の現状と課題を明らかにする。

# 全国大学書写書道教育学会 第21回大会（愛知大会）研究発表

4-3

## 書写教育におけるカリキュラム開発のための基礎的研究

### -「変身作文」を取り入れた書写授業の実践を中心に-

尾道市立土堂小学校教諭 藤井浩治

広島大学助教授 松本仁志

書写教育におけるカリキュラム開発は、柔軟に構えて様々な方向性で検討していくことが今後求められると考える。その考え方得る多様な方向性の中で、本研究は、これまで以上に言語の学習としての理念を徹底させた場合のカリキュラム開発を目的としている。具体的には、書写は従来通り国語科に位置するものとし、そのカリキュラムを、「書写技能の系統的学習の系列」と「国語科の他領域の学習との関連を図る学習の系列」の二系列に分けて構成する。その二系列相互を有機的に関連させた形で構造化することが、国語科における言語の学習としての書写の位置づけを明確にし、かつ言語生活に生きる書写力の育成にとって有効であるという仮説を立てて進めている。

本発表では、仮説としての二系列構造の書写カリキュラムを提示し、次に、仮説検証のために計画・実施した、「読むこと」「書くこと」の学習との関連を図る書写授業の内、「変身作文」を取り入れた書写授業に焦点をあて、その実践結果を報告する。その中で、言語生活に生きる書写力の育成という点における有効性およびカリキュラム開発に向けた課題とを明らかにする。

なお、本発表は、「書写教育におけるカリキュラムの開発のための基礎的研究－『読むこと』『書くこと』に生きる書写授業の実践をもとに－」（『書写書道教育研究』第19号所収）に関する継続的研究報告である。